小学校における生成系 AI 活用ガイドライン（教員向け）

1. はじめに

- **生成系 AI（Generative AI）** は、人間のように文章や画像を生成する機能をもった人工知能ツールです。ChatGPT のような対話型 AI は、児童の自由研究や調べ学習の補助など、多様な教育的可能性を秘めています。
- 一方で、フロリダ州における児童が AI に深く依存してしまった事例や、AI が不適切な内容を提案したケースなど、**心理的・倫理的リスク**も指摘されています。
- 本ガイドラインは、教員が小学校現場で生成系 AI を **「安全・安心」「効果的」「倫理的」** に活用するための基本方針をまとめたものです。

2. AI 活用の前提：教師の専門性と学習指導要領との整合性

1. **AI は「教育の主体」ではなく、あくまで「道具」**
   - AI に授業のすべてを任せるのではなく、**教師が目的・範囲をコントロール**したうえで活用することが重要です。
   - 「AI＝道具、教師＝学習をデザイン・ファシリテートする専門家」という立ち位置を常に意識しましょう。
2. **学習指導要領や教科目標との整合**
   - 生成系 AI は、新学習指導要領が重視する「情報活用能力」や「批判的思考力」を育む一助となり得ます。
   - ただし、**「読む」「書く」など基礎的な学力や思考プロセスを子ども自身が身につける」** 機会を奪わないことが大前提です。
3. **研修・情報共有**
   - AI 技術は日々進化しています。定期的に校内研修や勉強会を実施し、教員同士で最新情報・実践事例を共有する仕組みをつくりましょう。
   - 地域や教育委員会との連携、高専・大学からの専門家アドバイスも有効です。

3. 具体的な活用例

以下は、あくまで「一例」です。教科や学年、児童の実態に合わせて検討してください。

1. **調べ学習や自由研究のサポート**
   - 例：興味をもったテーマについて AI に質問し、**AI の回答＋図書や他の資料**を参照してまとめる。
   - **ポイント**：AI の回答が正しいかどうか、必ず他の情報源と突き合わせるよう指導する。
2. **作文や文章表現のブラッシュアップ**
   - 例：児童が書いた作文を AI に要約・言い換えさせ、「どこが違うか」「どちらの表現がわかりやすいか」をクラスで議論する。
   - **ポイント**：書き手（児童）のオリジナリティを尊重し、AI の提案をあくまで「一つの参考例」と位置づける。

3. **教材作成・校務の効率化**（教師向け）
    - 例：学級通信やお便りの文例、学習プリント用のアイデア出しを AI に依頼する。
    - **ポイント**：個人情報や機密事項を AI に入力しないこと。必ず**教員自身が誤情報や不適切表現がないか最終チェック**を行う。

4. リスクと注意点

1. **誤情報や不適切表現**
    - AI はデータの偏りや学習内容の欠陥により、まちがった内容や不適切な表現を出す場合があります。
    - **児童には「AI の答え＝絶対正しい」という誤解を与えないよう指導**してください。
2. **児童の心理的影響・依存リスク**
    - フロリダ州で報告されたように、AI に深く依存してしまう児童が出る可能性があります。
    - **AI には「心」がない**こと、人間同士の対話や相談のほうが大切であることを、繰り返し説明しましょう。
    - もし児童が AI とのやり取りで不安定な様子を見せた場合は、**すぐ管理職やスクールカウンセラー、保護者と情報共有**し、適切な専門機関への相談につなげてください。
3. **いじめ・悪用**
    - 児童が AI を使って誹謗中傷や差別的表現を生成・拡散する恐れがあります。
    - **定期的に情報モラル教育を行う**とともに、問題が起きた際は早期に把握・対応する体制を整えましょう。
4. **個人情報や児童データの取り扱い**
    - **生徒名・住所・成績など、個人を特定できる情報は AI に入力しない**よう徹底する。
    - 学校端末・ネットワーク設定においても、フィルタリングや利用制限などのセキュリティ対策を検討してください。

5. トラブル事例と早期対応

1. **AI に丸写しした課題提出**
    - 調べ学習などで児童が AI の回答を「コピペ」して提出し、思考プロセスを経ていない場合があります。
    - **チェック方法**：授業中にプロセスや根拠を口頭で質問する／途中段階のメモや下書きを評価する。
    - **再提出を求める基準**やルールを学級・学年で共有しておくと、児童も教師も混乱を減らせます。
2. **児童が不適切な文章を生成した／された**
    - AI による暴言・誹謗中傷が他児童に向けられた場合は、いじめと同様に**早急に対応**し、被害児童へのフォローも行う。
    - **校長や教育委員会、保護者とも連携**し、再発防止策を検討してください。
3. **AI チャットボットで子どもが不安を感じた**
    - 「AI の言葉が怖かった」「命令っぽい口調で混乱した」など、児童が心理的ダメージを受ける可能性があります。

- 児童の訴えがあれば即座に傾聴し、**スクールカウンセラーや必要な専門機関につなぐ**のが基本姿勢です。

6. 指導のポイント

1. **多角的な学習体験をデザインする**
    - AI からの情報だけでなく、本やネット、地域の方との対話など**複数のリソースを使う学習**を組み合わせ、批判的思考を育てましょう。
2. **「AI の答えにツッコミを入れてみる」演習**
    - あえて AI に質問し、でたらめな答えや偏った答えを探し、その原因を考察する活動は児童の**情報リテラシー**を高めます。
3. **評価方法の工夫**
    - 作文や自由研究などで「AI を活用した形跡があるか」を問題視するだけではなく、**児童自身の思考プロセスや学習成果を確認する仕組み**を導入しましょう。
    - 途中メモの提出や口頭での説明を重視することで、AI の丸写しを防ぎつつ、児童の理解を評価できます。
4. **教師自身のリテラシー向上**
    - まずは教員が AI を試し、どのような誤回答や不適切表現が出るか把握しておくことが大事です。
    - 校内研修や分担しての情報収集など、「教師同士で互いに教え合う体制」を構築しましょう。

7. 保護者・地域との連携

1. **保護者説明会・連絡**
    - 学期の初めや保護者会などで、「AI を授業でどのように活用するか」「リスクと注意点は何か」を共有します。
    - **家庭での利用ルールや、困ったときの相談先**も含めて説明し、保護者が安心できるようにしましょう。
2. **地域の専門家・大学との連携**
    - 地元の ICT 企業や高専・大学の研究者に協力を仰ぎ、AI の最新動向や教育活用の事例を学ぶ機会を設けると効果的です。
3. **相談フローの整備**
    - 児童が AI を使ったトラブルに巻き込まれたり、心身の不調を示したりした場合に備え、**保護者への連絡やスクールカウンセラーとの連携フロー**を明文化しておきましょう。

8. 今後の展望とガイドライン更新

- 生成系 AI は新しい技術であり、進化も早い分野です。海外ではフロリダ州をはじめ、各州・各国が学校現場での活用ガイドラインを試行錯誤しながら更新し続けています。
- 日本でも文部科学省が 2023 年 7 月に「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定ガイドライン」を公表し、今後も改訂が続く見込みです。
- **学校や教育委員会レベルで、年に 1 回程度ガイドラインを見直す仕組み**をつくり、現場で起きたトラブルや成功事例を積極的に共有してアップデートを図りましょう。

まとめ

小学校での生成系 AI 活用は、**子どもの興味関心を引き出し、学びを広げる可能性**を秘めています。しかし同時に、誤情報・依存リスク・いじめへの悪用など、リスクへの適切な目配りが欠かせません。
教師は専門家として、**「授業での AI 活用目的は何か」「どのように児童の学習を深めるか」を明確にデザイン**し、児童の安全と健全な発達を最優先に考える必要があります。
保護者や地域社会と連携しつつ、**常に最新情報をチェックし、ガイドラインの改善を続ける**姿勢が望まれます。教師自身が学び続けることで、子どもたちにとって安心で価値ある AI 活用環境を整えていきましょう。